

矢島 渚男 選

水澄んで空仰ぎたき泥鰌かな

岡山市 西尾 照常

【評】「トジョウ」は「空を仰ぎたき泥鰌」のことかある。それは彼らも空を仰ぎたいからだと考えた。こんな綺麗な青空を見ない手はない。

荒縄のゆるみ始まる干し大根

深谷市 三上 通而

【評】荒縄で大根を束ねて干す。干しあがったところで漬ける。その目安は荒縄の緩み具合。丹念な観察が優れる。栽培している方だろうか。忘れ潮に小さき命秋日和

枚方市 衛藤 聡一

【評】干潮の岩礁の水溜りにほの小魚や藤壺、海藻をはじめ、沢山の命が輝いている。それを慈しむように眺めて時間を忘れた。

木の上の明恵の詠みし月あかし

伊賀市 福沢 義男

初めての稲刈り園児稲穂上へ

岩山市 西岡KAYO

手刀でアリガト囃者の秋の道

飯田市 井原 修

忘れゆく人の名花の名神無月

越谷市 花井芳喜代

肉球で猫が顔く月夜

高崎市 長友 聖次

サロマ湖に溶ける夕日や七竈

春日部市 中沢 泰三

秋耕や馬糞匂し少年期

青梅市 松野 英昌

宇多喜代子 選

はたと晩年すでに晩年金木犀

東京都 斎木百合子

【評】同齡者の多くの共感を得た。ふつと思われる句。「はたと」すなわち「はた」の言葉がうまい。生きておろ、下五の「金木犀」も説得力がある。遠くまで遠くまで見ゆ山の秋

千葉市 小林 昭

【評】下五の「山の秋」が広がりを出している。遠方の景が見えるのも秋ならではである。「遠くまで」を重ねたのも秋の気配の透明度をよく言い表している。

檀原市 城 恵三

【評】米寿までよく生きたものというひそかな自祝の句。顔にくる風に、今日生きているといういきいきとした実感がある。

冬近し何か忘れて来たような

神奈川県 中村 昌男

とび石の三角四角月の庭

神戸市 増田キヌエ

小春日や赤子にもある土踏ます

龍ヶ崎市 小宮 光司

夕月や空は青さをまだ残し

新潟市 大竹 健一

子らの列ビニール袋に透く団栗

我孫子市 森住 昌弘

小走りの猫は影絵に月の庭

海老名市 山田 山人

見はるかす上毛三山紅葉燃ゆ

松戸市 倉林 高次

正木ゆう子 選

わが町に蹴る石もなき残暑かな

千葉市 笹沼 郁夫

【評】確かに。舗装道路に石はない。学校帰り、凸凹道の石を蹴り蹴り歩くのは、無為の豊かさに満ちた時間だった。その辺に転がって、夕日に影を作っていた石たちよ、いま何処。新米よ独りごちする夕餉かな

川崎市 堀尾 笑王

【評】「今日から新米よ」「やっばり美味いな」などと言つ相手がいなるときも、自分で自分に言つ。口に出さずにはいられない新米の嬉しさ。見える夢覚めて見えぬ目虫すたく

宮崎市 藤田 長行

【評】ああそうなのだと胸を衝かれる。経験者しか詠めないし、同じ経験をしている人はよくぞ詠んでくれたと思つたらう。季節が効いている。恋すれば癒える肩凝り車の花

志木市 谷村 康志

小鳥来る後ろ歩き三百歩

京都市 根来美知代

聞き耳を立てて南蛮煙管かな

相模原市 大沼 卓郎

鶴鶴のきれいな駅に待ち合はす

宇陀市 泉尾 武則

断崖の枕を捨てて鷹渡る

川崎市 沼田 広美

ラ・フランス黒いネイルが驚つかみ

山形県 沼沢さこみ

対岸の稲架まつ直ぐに匂ひくる

武蔵野市 渡辺 一甫

小澤 實 選

腹黒き（こ）そ良けれ鯛焼は

埼玉県 小町 季生

【評】「腹黒き」といえば、たいがい嫌なところであるはずなのだが、鯛焼の場合はいい、というのである。腹に黒い鯛がたっぷり入っているから。こんな機知の句も楽しい。

再会に叩く背中や紅葉山

高知市 加田 紗智

【評】紅葉の盛りの山での再会。おもわず久しぶりに会った友の背中を叩いてしまふ。親しさの現れであり、紅葉に高揚しているのだ。

東京都 中島 徒雁

【評】人間にとって、猛毒で知られている天狗首を、栗鼠が平気で食べている。栗鼠にとっては、無害なのか。自然はふしぎだ。

和らぎの水やはらかに今年酒

東京都 森 一平

目を閉じる湯浴みの猿や初時雨

さいたま市 新原 健

肉球に保湿クリーム冬めきのぬ

高岡市 池田 典恵

犬と尻鳴き合つて露の朝

長野市 中里とも子

野葡萄の美やシャガールの絵の具箱

東京都 中沢 治美

秋冷のエスカレーターみな無口

伊勢市 藤田ゆきまら

牛と豚 二刀流なり芋煮会

守谷市 久保田洋一

戦争停止求める

第一次世界大戦が始まって4年が過ぎた1918年、メディアではシベリア出兵の是非が論じられていた。島国の日本は将来に備え積極的に大陸へ進出すべきだという意見も多かった中、与謝野晶子は同年4月、「何故の出兵か」と批判し、戦争停止を求める文を雑誌に寄稿した。女より智慧ありといふ男達の戦いを歌めぬ賢く

『火の鳥』

短歌あれこれ 松村由利子（歌人）

この歌は7月11日、東京日日新聞に掲載された。今読むと戦争をやめないのが「男達」だという断定に違和感を抱く人もいるだろうが、当時女性には参政権がなかった。為政者は男たちであり、晶子は彼らの価値観だけがで国が動かされることに割り切れない思いを抱いていたのだ。女よりも賢明なはずなのに……という皮肉が痛烈である。出兵は8月に決行された。歴史上の出来事はいずれ後世で評価される。歌人は常に臆せず歌を詠むべきなのだと思う。



題字デザイン・イラスト 福田美蘭